

「地獄」と「極楽」

2022.5.30 校長 西谷 秀幸

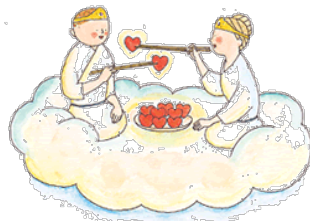
皆さんは、「地獄」とは、どんなところか知っていますか。今日は「地獄」に関する昔のお話をします。

ある人が、「地獄」とはどんなところなのかと思い、見に行くことにしました。「地獄」に着くとちょうど食事の時間でした。そしてなんと、「地獄」なのに、テーブルには、おいしそうな食べ物がたくさん並んでいたのです。

そこに、やせ細った「地獄」の人たちが入ってきて席に着きました。見ると、目の前に2m近くある長いお箸が置いてありました。「地獄」では、それを使って食べなくてはならなかったのです。

「地獄」の人たちは、おいしそうな食べ物を他の人に取られてたまるか…とその長いお箸を使い、他の人より先に食べようとしました。しかし、お箸が長すぎるため、食べ物が口に届きません。さらに、長いお箸がテーブルの上でぶつかり合い、食べ物は下に落ちてしまいました。そして、とうとう食事の時間が終わりになってしまう、誰一人として食べるすることができませんでした。

次に、その人は「極楽」に行ってみました。「極楽」というのは、日本や中国など一部の国での言い方で、「天国」のことです。



その「極楽」もちょうど食事の時間でした。そして、「地獄」と同じように、おいしそうな食事がたくさん並んでいました。そこに、楽しそうな表情で、すごく健康そうな人たちが入ってきて席に着きました。そして、「地獄」の人たちと同じように、長いお箸を使って食べ始めました。

「地獄」の人たちは、長いお箸のせいで一口も食べられませんでした。が、「極楽」の人たちは、「これはおいしそうな食事ですね。お一ついかがですか。」と言って、目の前にいる人に食べさせてあげていました。そして、食べさせてもらった人も「とてもおいしいです。あなたもいかがですか。」と、お返しに相手の口に食べ物を運んであげました。こうして、楽しく会話をしながら、お互いに食べさせ合うことでおいしい食事をすべて食べることができ、楽しく食事の時間を過ごせたのです。

さて、今話を聞いて、「地獄」と「極楽」の違いが分かったでしょうか。「他人のことを考えずに、自分だけが良い思いをしようと行動している」のが「地獄」、反対に、「他人のことを思いやって、共に支えながら楽しく行動している」のが「極楽」です。

「地獄」と「極楽」は、大きな違いがあるようで、実は、ほんの少しの違いしかなく、その違いは「私たちの心の中」にあるのです。

皆さんは、自分のクラスを「地獄」のようなクラスにしたいですか。それとも、「極楽」のようなクラスにしたいですか。

新しい学年になって2か月が過ぎました。自分たちのクラスを「極楽のような楽しいクラス」にするためには、一人一人がどんな行動をすれば良いか、ぜひ、クラスでも話し合ってみてください。

これで朝会のお話を終わります。

(裏面に「先生方へ」があります)

〈先生方へ〉

先週は校内研究における5年生の授業研究、お疲れさまでした。「授業を通して、みんなで議論し、研究していく」…まさに、5年生の先生方が授業研究を繰り返し、その上で改善が繰り返された授業を通して、学校全体で授業研究をしていったことで、昨年度よりもバージョンアップした研究会になりました。授業者の島崎先生をはじめ、5年生の先生方、お疲れさまでした。ありがとうございました。

さて、今日の話は、仏教における有名な説話の1つなので、もしかしたら、どこかで聞いたことがある方もいるかもしれません。

学級経営の基礎作りをする4月に対し、5・6月は具体的に動き、それを確立していく時期です。今のクラスは、「他人を思いやる仲良し学級」になっているか、もしそうでなければ、そのようなクラスを作るためにはどうしたらいいか、各学級で具体的に考え、行動しやすいように、この話をしました。

担任時代、私は子供たちに、「情けは人の為ならず」という言葉は、「情け（他人への施し）は人の為にならない。」という意味ではなく、「人に情けをかけていけば、巡り巡って、自分に戻ってくるんだよ。」ということの子供たちに教えてきました。その考えこそが、仏教の世界における「因果」＝「原因があれば結果がある」です。その点では、この話は「因果」について教える際にも良い話だと言えます。学年・学級でも実態に合わせて、補足していただくと助かります。

さて、1学期も半分が過ぎ、この時期は学級経営のほころびが子供たちの乱れとして表出してきます。ですから、学級経営方針を再確認して、学級のシステムを再構築する良い機会と捉えて取り組んでいきましょう。

【資料】地獄と極楽の話

ある人が地獄と極楽の見物に出かけようと思いたちました。まず地獄へ行きました。すると、ちょうど大きな円卓を囲んで、大勢の人たちが食事をするところでした。その人々の姿は、娑婆（しゃば）に住む私共と変わりありませんでした。大きな円卓の真ん中にご馳走が山と盛られてあるので、普通の箸では届きません。皆がそれぞれに5～6尺（2m弱）もあるような長い箸を持っています。ところが、箸があまりにも長すぎて、折角挟んでも自分の口に運ぶことができません。しかも、人に食べられてなるものかとみんな我れ先になって、自分が食べることばかり考えるものですから、長い箸と箸が音をたてて交錯し、結局、ご馳走は卓上に散乱して、誰一人として食べることはできませんでした。食べようとして食べ得ざる時、人の心は焰となって怒りの火を発するのです。

ところで、その人は次に極楽を見に行きました。極楽も地獄も、人そのものの姿には、全く相違はありませんでした。食事の時になりました。大きな円卓の真ん中にご馳走が山のように盛られてあり、人々は長い箸を持っています。それもまた地獄と全く同じことでした。ところが、ここではその人々がそれぞれ、自分のお箸に挟んだご馳走を「これはおいしそうでございます。お一つ如何ですか。」と人の口へ運んであげていました。「結構なお味でございます。あなたさまも如何ですか。」と互いが互いに食べさせあっているのです。「有難うございます。お勿体ないこと。」と食事は実に和やかに進んで、みるみるうちにご馳走はなくなり、最後には「ありがとうございました。ご馳走さまでございました。」とみんなで喜び合い、感謝し合いながら終わりました。